

能力主義の先に

野瀬 隆平

弁護士と土木作業員。どちらを選ぶかと聞かれれば、多くの人は弁護士と答えるだろう。収入も多く社会的な地位も高い。職業に貴賤なしとはいうものの、これが偽らざるところだ。

弁護士は自らの努力によってその地位を獲得したのだ。難しい試験に合格して資格を取ったのだが、その機会は誰にでも平等に与えられている。従って、あくまでも自分の努力の結果、身に付けた能力であり、勝ち取った地位であると考ええる。

確かに、大学の入学試験にしても司法試験にしても、試験を受けるチャンスは誰にでもある。しかし、合格・不合格を決定づけるのは、本当に個人の努力だけだろうか。

このように疑問を投げかけるのは、「白熱教室」で有名なハーバード大学のマイケル・サンデルである。そもそも受験できるような環境に、だれもが公平に置かれているとは云えない。自分がどんな家庭に生まれ育ったのか、本人にはどうしても変えられない条件が、すでにあるではないか。

この事実を無視して、すべてが自らの努力の賜物であり、その成果を自分だけが享受するのは当然だと考えるのはおかしいと云うのである。

ここで注目すべきことがある。彼が能力主義を問題にするのは、本当の平等などあり得ないという、単純な理由だけではないという点だ。

仮に完全な平等があったとしても、社会的に高い地位を得た者が驕りの気持ちを抱き、一方で敗れた側の人々が負の感情を持つことは、容易に解消することはできない。これは富の再配分によっても乗り越えられない感情の問題である。

従って、弁護士と同じように土木作業員も、社会生活を営む上で皆に不可欠な存在であると考え、互いに尊重し合う心が肝要であると主張する。このような倫理観を、サンデルは「共通善」と呼んでいる。

行きすぎた能力主義の弊害を示す一つの例が、アメリカ社会に於ける勝者と敗者の分断だ。敗れた側の人たちが抱く不満の受け皿として出てきたのが、トランプ大統領なのである。

<参考文献>

マイケル・サンデル著 The Tyranny of Merit What's Become of the Common Good?
日本語訳 鬼澤 忍 『実力も運のうちー能力主義は正義か?』